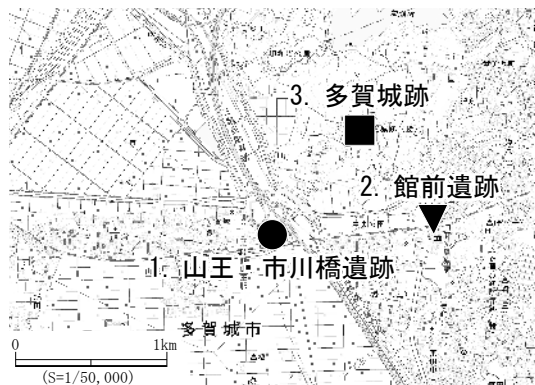


所在地 宮城県多賀城市山王・南宮・市川・浮島ほか

立地環境 仙台平野北端部、砂押川両岸の標高2～3mの沖積地

発見遺構 掘立柱建物、竪穴建物、材木堀、溝、土坑、畑、河川など

年代 6世紀末～11世紀



第1図 山王・市川橋・館前遺跡の位置

遺跡の概要

山王遺跡・市川橋遺跡は、宮城県中部の太平洋岸、仙台平野北端部の沖積地に立地する（第1図）。南流する砂押川両岸に位置し、標高は2～3mである。両遺跡を合わせた東西約2.4km、南北約1.0kmの範囲からは、弥生時代中期、古墳時代前・中・後期、古代、中世、近世の遺構・遺物が検出されている。館前遺跡は多賀城外郭南東隅から南東へ約200mの島状に独立した台地上に立地する。本稿では6世紀末以降から11世紀代までの古墳時代後期から古代について取り上げる

1. 区画施設・方格地割の変遷

（1）区画1～3期

この時期の遺構・遺物は八幡・伏石地区（第2図）で多数確認され、おおまかに3時期の変遷が想定されている（文献139）。本稿では、区画溝や材木堀によって区画された集落が成立する6世紀末～7世紀中頃の区画1期、7世紀後半～8世紀前半頃の区画2期、8世紀後半頃の区画3期に区分して記述する（註1）。

区画1期（第3図）は、方形を基調として直線的に伸びる区画溝と材木堀で東西約129m、南北116m以上の範囲が区画される区画A、不整形に湾曲した区画溝と材木堀で東西約207m、南北128m以上の範囲が区画される区画Bが認められ、区画Aから区画Bへ変遷する。

区画2期（第4図）は、区画溝が西へ10～40°前後傾いてL字状に伸びており、東西180m以上、南北300m以上の範囲が区画される。そしてその内側には、東西約190m、南北約235mの南北に長い平行四辺形状に材木堀が設けられる（区画C）。

区画3期（第5図）は、区画溝と材木堀によって区画D～Fの3つに区画されており、区画D・Eとその南側に位置する区画Fの間にはSX12100東西道路が確認されている。区画Dは材木堀で囲まれた範囲が東西約71m、南北120m以上の南北に長い長方形状となる。区画Eは西辺南側と南辺で材木堀を確認し、東西98m以上である。区画Fは北辺の材木堀の一部を確認している。

ところで、区画3期までには多賀城跡外郭南門から南へ伸びる南北大路と、外郭南辺と同じ傾きで東西に伸び、外郭南門から約520mの位置で交差する東西大路が敷設される（第7図①）。南北大路は側溝心々距離が約18m、東西大路は約12mである。南北大路の成立時期をめぐっては、創建時期を推定できる遺物が零細であることもあり、8世紀前半頃（文献26）、8世紀中葉～後半頃（文献24・142・149・161）、8世紀後葉頃（文献20・22・118・127）と諸説ある。

（2）方格地割Ⅰ～Ⅲ期

8世紀末頃には、側溝心々距離が約23mに拡張された南北大路と約12mの東西大路を基準にした

方格地割が形成される。方格地割の街区呼称は、南北大路や東西大路からそれぞれ近い順に北1・北2道路、あるいは西1・西2道路とし、各道路で区切られた街区を「北1西2区」とする（第2図）。

方格地割全体の変遷に関しては、東西大路に面する北1・南1区が造営されたⅠ期（8世紀末～9世紀前葉頃）、北2・南2区へ拡大したⅡ期（9世紀前半～中葉頃）、北3区などが造営されて方格地割が完成するⅢ期（9世紀後半～10世紀後半頃）という変遷案が最初に示され（文献136）、これを基礎として、Ⅲ期の方格地割がもっとも拡大する時期と縁辺部が廃絶する時期を分けたⅠ～Ⅳ期の変遷（文献20・118）が提示された。しかし、その後の発掘調査によってⅠ期に遡る北2a道路の存在が明らかとなり、また方格地割の規格性などの検討から、方格地割成立当初より北2区から南2区まで成立し、全体でⅠ～Ⅲ期の変遷を想定する説が示された（文献18・139）。本稿では文献139の変遷案をもとに、最新の成果（文献109）を加えて方格地割の変遷を考えてみたい。

方格地割Ⅰ期（8世紀末～9世紀前葉頃）では、北1・南1道路が西1～西9道路間、北2道路は西1～西7道路間に延び、北2a道路が西3～西5道路間に敷設される（第7図②）。北2a道路は区画3期のSX12100東西道路を踏襲しているため、北2a西4・5区は他の街区に比べ東西に長い長方形形状となる。そのほか南2道路は西0～西1道路間、南1道路は東0～東1道路間で確認している。

方格地割Ⅱ期（9世紀中葉～10世紀前半頃）では、西6a道路が北2道路から南北―東西―南北のクランク状に曲がって延び、北3道路は西3a～西5道路間に敷設されたとみられる。南2道路は西1～西9道路間、南3道路が西2～西9道路間に敷設され、本期に街区が最も拡大したと考えられる。また、南1西7・8区では街区内を細分する南0―1間道路が設けられた。文献109からは南3道路を確認したことに加え、西1道路より西の東西道路が大路と平行すること、その結果、街区の形が従来の平行四辺形ではなく方形に復元できること、西3～西9道路は街区南方区画溝まで延びるが、南3道路より南は主として畑耕作域として利用されたことなど多くの新知見が得られた（第7図③）。なお、Ⅱ期は10世紀前葉に降下した灰白色火山灰の下層で道路側溝と区画溝に改修がみられることから、Ⅱ-A期（9世紀中葉頃）とⅡ-B期（9世紀後葉～10世紀前半頃）に分けられる。また北2a道路と西4道路の交差点から南の地点において、道路側溝に貞観11年（869）の津波に起因する可能性のあるイベント堆積物が確認されており、Ⅱ-A期からⅡ-B期へ改修が貞観11年の陸奥国大地震を契機とする説が提示されている（註2）（文献165～167）。

方格地割Ⅲ期（10世紀後半頃）は、北2道路より北側の北2a・北3a・西5・西6道路が廃絶し、方格地割が縁辺部から廃絶していったと想定されている（第7図④）。ただし、近年では10～11世紀の土器編年およびその年代観の見直しが行われ（文献114・130）、従来の年代観よりも新しく考える意見があることから、方格地割廃絶の年代についても今後再検討していく必要がある。

2. 区画施設・方格地割内部の様相

（1）区画1～3期

【区画1期】

区画内部に45棟以上の堅穴建物を主体として井戸、土坑が確認され、区画Bの時期に居住域がもっとも拡大する（文献139、第3図）。堅穴建物は、一辺が5.9m以上の大型のものと5.5m以下の小・中型のものに分けられる。区画の中央にはSD2050Bがみられ、区画南側で東西に流れるSD100に合流している。SD100やそれと一連とみられるSD5093からは、土器にくわえて多量の木製品、骨角製品、動物依存体が出土し、区画1期を特徴づける遺物である。木製品には武器またはその一部（第6図1～5）、馬具（6）、農耕具（7～9）、漁労具（10）、香炉（11）があり、骨角製品には武器またはその一部（12～16）、漁労具（17・18）、卜骨（19・20）がみられるなど、農耕だけでなく漁労・狩猟・

採集といった生業、武器・馬具の存在、祭祀の様相の一部も明らかとなっている（文献 144・162）。

【区画 2 期】

区画の内外には掘立柱建物 32 棟、竪穴建物 6 棟、井戸 2 基が確認され、区画 1 期と異なり掘立柱建物が主体となる（文献 139、第 4 図）。掘立柱建物は区画に合わせて西に傾いた桁行 3 間あるいは 2 間、梁行 2 間のものが多いが、SD180 区画溝西側に位置する SB5151 は桁行 5 間、梁行 3 間で他の建物より規模が大きく、区画 2 期の主要な建物とみられる。掘立柱建物は北で西に 10～20° 傾くものと 40° 前後傾くものに大別でき、材木堀と重複するものもみられることから、2 時期以上に細分できると考えられるが、区画北西部や南部中央は部分的な確認にとどまっており、具体的な様相把握は今後の課題である。出土遺物では、SD180 から多量の土器や木製品が出土している。なお、区画 2 期は 7 世紀後半に比定できる須恵器がわずかであることから、区画 1 期から 2 期は 7 世紀後半に一度断絶したと考える意見もある（文献 144・162）。

【区画 3 期】

区画内部は 2 期と同様に掘立柱建物が主体で竪穴建物、井戸などで構成されるが、なかでも区画 D は中央にある桁行 5 間、梁行 3 間の SB7776 を主屋として北へ「コ」の字型にひらく建物配置である（文献 139、第 5 図）。出土遺物では、区画 D の SD461 区画溝などから漆付着土器が出土し、その他の溝からは天平宝字 7 年（763）の具注曆断簡や「陸奥国戸口損益帳」の草案で紙背に「×□〔済カ〕敬×」と書かれた漆紙文書が出土していることから（文献 52）、周囲に漆工房があったと考えられる。

（2）方格地割Ⅰ～Ⅲ期の主要な街区

【北 1 西 3 区】

Ⅰ～Ⅲ期にかけて 5 時期の変遷があり（文献 136）、なかでもⅡ－B 期の 9 世紀後半頃にもっとも遺構数が多く、区画内部が材木堀によって 2 つに分けられる（第 8 図①）。南半部では桁行 5 間、梁行 3 間の三面廂付建物である SB589 を主屋として南東に南北棟の建物が配置され、北側には桁行 2 間、梁行 2 間の小規模な倉庫とみられる建物が横方向へ列状に並ぶ。出土遺物には国産の緑釉・灰釉陶器や中国産の白磁・青磁などの高級食器のほか、土師器、須恵器、硯、木製食器・容器・農耕具、鉄製容器・紡錘車など多様である。こうした建物配置や出土遺物から、国司クラスの館と推定されている。

【南 1 西 2 区】

Ⅰ～Ⅲ期にかけて 5 時期の変遷があり（文献 136）、特にⅡ－A 期の 9 世紀中葉頃には、南東側に桁行 4 間、梁行 3 間の二面廂付建物である SB1241 を主屋とし、その南に空地が設けられる（第 8 図②）。この周囲からは「守」と書かれた墨書土器（第 9 図 1～3）が 5 点出土していることから、「国守」の館と推定されている。また注目すべきは、区画中央部から南東部にかけてみられる SD1020 で、クランク状に曲がる形状や溝水浄化あるいは貯水の施設とみられる枡・土坑が存在することから、「遣水」の可能性が指摘されている。周辺に土器供膳具の廃棄土坑が多数分布し、多量の緑釉陶器（4～8）・灰釉陶器（9～15）だけでなく白磁（16～18）・青磁（19）・黄釉褐彩磁（20）も出土しており、饗宴を行った庭園としての性格も想定される。

これに対し、後述する国守館の可能性が高い北 1 西 7 区や館前遺跡の主屋は四面廂付建物で、SB1241 は規模自体も小さいことから、国守館とするには慎重な意見もある（文献 10・113）。

【北 1 西 7 区】

Ⅱ～Ⅲ期にかけて 4 時期の変遷があり（文献 50・53）、特にⅡ－B 期の 10 世紀前半頃には桁行 9 間、梁行 4 間の四面廂付建物である SB474 を主屋として南西側に南北棟建物が配置されており（第 8 図③）、井戸や土器廃棄土坑もみられる。出土遺物には多量の緑釉・灰釉陶器や青磁・黄彩褐釉磁が

出土しているほか、「右大臣殿 餞馬収文」と書かれた題箋軸（第9図21）が出土し、右大臣就任に際して餞馬を贈る可能性が高いのは国守クラスと考えられることから、国守館と推定されている。

【北1西1区・北1東1区】

I～II-A期にかけて、東1区では桁行11間、梁行2間の掘立柱建物が東西に2棟ずつ、西1区も同様に東西2棟ずつ建物が配置されたと想定されており（文献40・44、第8図④）、西1区西列のSB2312・2330は内部の西側に2条の柱列を伴う特殊な構造のものである。これらの建物群の性格については、物資集積に関わる施設とする説（文献55）、馬関連の施設とする説（文献46）、蝦夷の饗宴に関わる施設とする説（文献25）など諸説ある。ただし近年では遺構・遺物の研究が進められ、西1区のSB2312・2330は内部の柱列が側柱の柱穴よりも規模が小さいことから床束とみられ、中世の絵巻物との比較から厩舎の可能性がある（文献116）。一方、西1区のSB2390や東1区のSB1000・1010は周囲に雨落溝がめぐり、また後者では足場穴とみられる小ピットが確認できるため（文献40）、厩舎ではなく官衙的な建物であったと考えられる。さらに南北大路と東西大路の交差点付近では陸奥国諸郡からの荷札が出土しており、米類を中心に綿や絹、布、馬など多様な品目がみられる（文献174～176）。饗宴との関係を示唆するような当該期の施釉陶磁器などの遺物が出土していないことを踏まえれば、砂押川を介した海上からのルートを含めた交通の要衝として、物資の集散にかかわる機能の比重が高かったと想定される。

【その他の街区】

北2西4区では、「会津郡主政益継」「解文 案」と書かれた題箋軸（第9図22）が出土したことから、郡主政の解文の案を整理・保管するなどの業務を行っていたことが分かり、会津郡の出先機関があったと推定され、このほかにも鍛冶遺構を伴う堅穴建物が確認されている（文献137）。

北3西5・6区（第8図⑤）では、東西大路に面する区画に比べて廂を有する掘立柱建物が少なく、畑とみられる小溝群（北3西5区SF395、SD11781など）が多く確認でき（文献139）、東西大路に面する街区よりも階層の低い人々が居住していたと推定される（文献113）。

南2西1区東側を流れる砂押川のSD2000からは人面や呪符の書かれた墨書土器（第9図23～26）、木製の斎串・馬形・蛇形・人形（27～32）、卜骨（33・34）など祭祀遺物が多数出土している（文献136）。また北2西2・3区北側の河川では、ウマを中心とした獣骨が多量に出土し、周囲に動物の解体や皮革・骨角器製作を行った工房の存在が想定されている（文献142）。

3. 方格地割外の様相

（1）館前遺跡

多賀城南東隅から南東へ約200mの独立した台地上に立地し（第2図）、9世紀前半から後半頃の掘立柱建物群が検出されている。中央に主屋となる桁行9間、梁行4間の四面廂付掘立柱建物のSB02があり、これと柱筋を揃えて前後に建物が配置され、東西にも台地の縁に沿って南北棟建物がみられる（文献28、第8図⑥）。SB02は多賀城跡を含めても最大規模の四面廂建物であり（文献113）、国司クラスの館であったと推定される。

なお、近年では出土遺物の再検討から成立時期を9世紀後葉頃とし、前述の南1西2区から移転した国司館と推定する説が示されている（文献170）。しかし南1西2区の主屋であるSB1241と館前遺跡のSB02では規模に格差がある一方、館前遺跡では施釉陶器が出土しておらず、これらの違いをどのように解釈するか今後の課題である。

（2）市川橋遺跡中谷地地区

市川橋遺跡のうち、方格地割北側で多賀城跡外郭西門の南西側に位置する中谷地地区（第2図）で

は、9世紀後半を中心とした時期に土葬墓93基、土器埋設遺構8基がまとまって検出されている（文献145、第10図1）。土葬墓のなかで木棺を確認できた木棺墓（2・3）は21基あり、規模は掘方全長152～254cmである。土坑墓（5）は全長82～243cmで、木棺墓の方が大きいものも多く、また土器埋設遺構（4）は掘方全長が84～98cmで、土葬墓よりも小規模である。副葬品は、木棺墓では1基につき土師器または須恵器が1・2点出土する程度であるが、土坑墓は土器の出土自体が少ない。こうした規模や副葬品の違いから、これらの墓には階層差が存在した可能性がある（文献164）。

註1 区画1期は文献138の古墳時代後期、区画2期が区画Ⅱ期、区画3期が区画Ⅲ期に対応する。

註2 このほかにも、貞観津波に起因する可能性があるイベント堆積物が南北大路東側溝や南1西2区のSK2298B、SD10061Bで検出されている（文献1～6・166・167・169）。

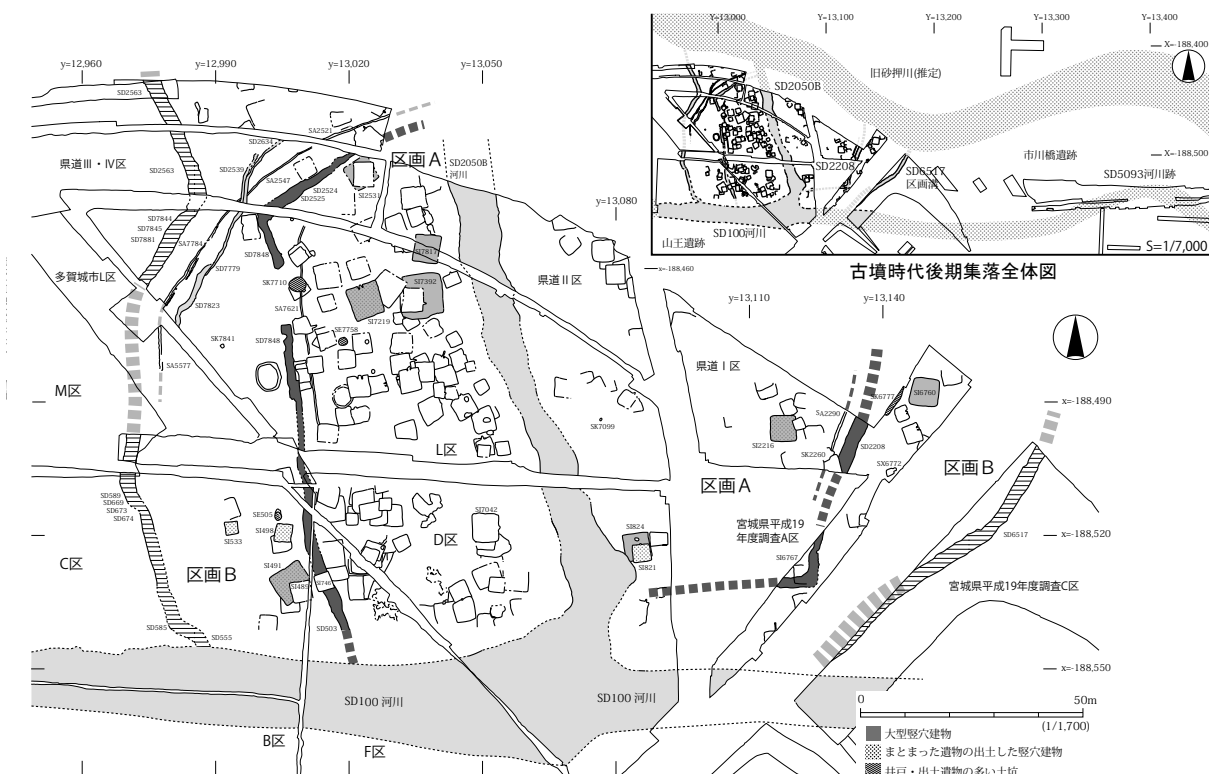
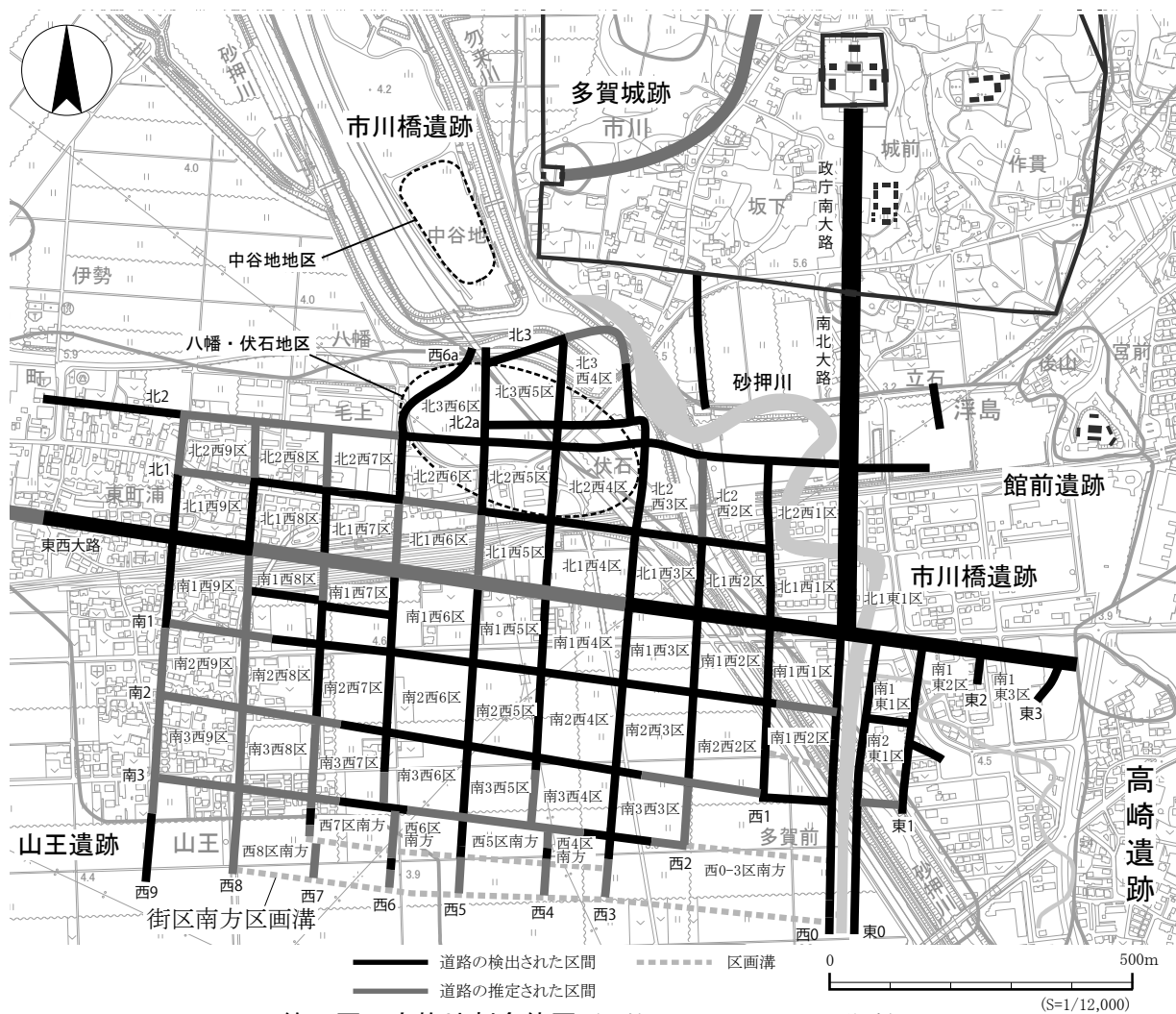
関連文献

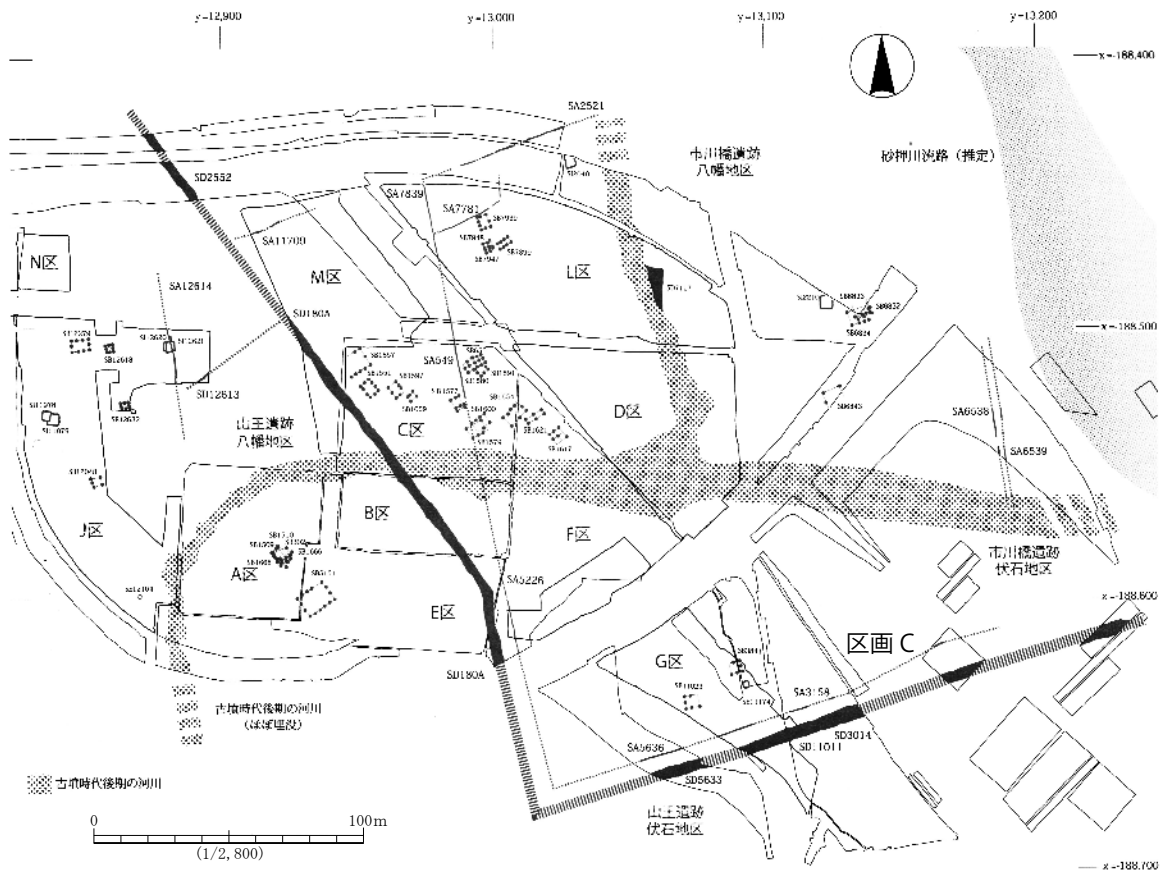
- 1 相原淳一 2017「多賀城城下とその周辺におけるイベント堆積物」『宮城考古学』第19号 pp.107-126
- 2 相原淳一 2018「多賀城と貞観津波」『考古学雑誌』第101巻第1号 pp.1-53 日本考古学会
- 3 相原淳一 2021a「陸奥国における869年貞観津波と復旧」『季刊考古学』第154号 pp.34-38 雄山閣
- 4 相原淳一 2021b「再考貞観津波」『考古学研究』第68巻第1号 pp.53-74
- 5 相原淳一・高橋守克・柳澤和明 2016「東日本大震災津波と貞観津波における浸水域に関する調査—多賀城城下とその周辺を中心に—」『宮城考古学』第18号 pp.111-128
- 6 相原淳一ほか 2019「貞観津波堆積層の構造と珪藻分析—宮城県多賀城市山王遺跡東西大路南側溝・山元町熊の作遺跡からの検討—」『東北歴史博物館研究紀要』第20号 pp.i・ii、17-44
- 7 吾妻俊典 2004「多賀城とその周辺におけるロクロ土師器の普及年代」『宮城考古学』第6号 pp.187-196
- 8 荒木志伸 2014「多賀城と城柵」江口桂（編）『古代官衙』考古調査ハンドブック11 pp.208-223 ニューサイエンス社
- 9 伊藤博幸 2010「古代東北における館の成立について—陸奥国の考古学的事例から—」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざまで—』上巻 pp.956-964 坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 10 家原圭太 2013「多賀城と古代都城」『宮城考古学』第15号 pp.173-190
- 11 家原圭太 2016「古代都城条坊制と地方官衙の方形街区」『日本考古学』第41号 pp.17-35
- 12 小原駿平 2019「市川橋遺跡SE2010井戸跡出土の古代土器」『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報—平成30年度—』pp.33-36
- 13 小原駿平 2021「古代後半期における土師器碗—多賀城周辺の事例から—」『宮城考古学』第23号 pp.173-188
- 14 後藤秀一 1994「東北地方における初期貿易陶磁の出土状況」『貿易陶磁研究』No.14 pp.114-125
- 15 櫻井友梓 2015「多賀城と城下の井戸」『宮城考古学』第17号 pp.117-134
- 16 櫻井友梓 2019「多賀城の木製食器」『宮城考古学』第21号 pp.73-88
- 17 齋藤和機 2016「交差点からみた多賀城の方格地割」『宮城考古学』第18号 pp.95-110
- 18 齋藤和機 2018「古代多賀城方格地割と東西大路」『Archaeo-Clio』第15号 pp.15-32 東京学芸大学考古学研究室
- 19 斎野裕彦 2017『津波災害痕の考古学的研究』同成社
- 20 鈴木孝行 2006a「多賀城外の方格地割」『第32回城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.86-97
- 21 鈴木孝行 2006b「多賀城周辺の挽物」『宮城考古学』第8号 pp.145-156
- 22 鈴木孝行 2010「多賀城方格地割の調査」『考古学ジャーナル』No.604 pp.14-18 ニューサイエンス社
- 23 鈴木拓也 2015「多賀城」条里制・古代都市研究会（編）『古代の都市と条里』pp.56-67 吉川弘文館
- 24 鈴木琢郎 2010「多賀城の大路造営」『福大史学』第81号 pp.15-42 福島大学史学会
- 25 鈴木琢郎 2013「蝦夷の朝貢・饗宴と多賀城—南北大路隣接地の大型建物群の理解をめぐる—」『福大史学』第82号 pp.91-109 福島大学史学会

- 26 高倉敏明 2008『多賀城跡—古代国家の東北支配の要衝—』日本の遺跡 30 同成社
- 27 高島英之 2006「仏面・人面墨書土器からみた古代在地社会における信仰形態の一樣相」国士舘大学考古学会（編）『古代の信仰と社会』pp. 131-155 六一書房
- 28 多賀城市教育委員会 1980『館前遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 1 集
- 29 多賀城市教育委員会 1982『高崎・市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 3 集
- 30～46 多賀城市教育委員会 1983～1985・1987・1990ab・1997ab・1998・1999・2001～2003・2004ab・2005・2011『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 4・5・8・13・21・24・41・44・50・55・60・67・70・74～76・107 集
- 47～60 多賀城市教育委員会 1986ab・1990・1991ab・1992・1993・1995・2006ab・2008・2010ab・2011『山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 9・10・22・26・27・30・34・39・81・86・94・100・101・105 集
- 61～64 多賀城市教育委員会 1992・2012・2019・2020『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 29・109・142・145 集
- 65・66 多賀城市教育委員会 1994・2005『市川橋遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 38・80 集
- 67 多賀城市教育委員会 1995『山王遺跡・市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 35 集
- 68 多賀城市教育委員会 1997『山王遺跡 I』多賀城市文化財調査報告書第 45 集
- 69・70 多賀城市教育委員会 1999・2017『高崎遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 56・133 集
- 71・72 多賀城市教育委員会 2002・2018『西沢遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 66・139 集
- 73 多賀城市教育委員会 2003『矢作ヶ館跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 71 集
- 74 多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡・高崎遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 72 集
- 75～84 多賀城市教育委員会 2005～2011・2013・2015・2016『多賀城市内の遺跡 1』多賀城市文化財調査報告書第 77・84・88・90・96・98・102・112・116・120 集
- 85～100 多賀城市教育委員会 2005～2008・2010～2021『多賀城市内の遺跡 2』多賀城市文化財調査報告書第 78・83・87・91・99・103・108・111・114・119・127・132・138・143・144・148 集
- 101 多賀城市教育委員会 2008『小原沢遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 92 集
- 102・103 多賀城市教育委員会 2011・2016『高崎古墳群ほか』多賀城市文化財調査報告書第 104・128 集
- 104 多賀城市教育委員会 2014『桜井館跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 115 集
- 105・106 多賀城市教育委員会 2015・2018『新田・山王遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 121・137 集
- 107 多賀城市教育委員会 2021a『新田・山王・高崎・西沢遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 146 集
- 108 多賀城市教育委員会 2021b『新田遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 149 集
- 109 多賀城市教育委員会 2023『多賀城地区ほ場整備事業に係る発掘調査報告書 山王遺跡（本文編・図版編）』多賀城市文化財調査報告書第 157 集
- 110 多賀城市史編纂委員会 1991『多賀城市史』第 4 巻（考古資料）
- 111 高野芳宏・菅原弘樹 1997「古代都市多賀城」『多賀城市史』第 1 巻（原始・古代・中世）pp. 335-367
- 112 高橋透 2013「東北地方における古代の塩の生産と流通—陸奥湾から太平洋沿岸地域を中心に—」『塩の生産・流通と官衙・集落』第 16 回古代官衙・集落研究会報告書 pp. 81-112 クバプロ
- 113 高橋透 2016「陸奥国府域における掘立柱廂付建物の特質」『宮城考古学』第 18 号 pp. 77-94
- 114 高橋透 2018「陸奥国府域における 10 世紀の土器様相」『宮城考古学』第 20 号 pp. 187-206
- 115 高橋透 2021a「古代都市多賀城」『九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集』第 2 集 pp. 189-194
- 116 高橋透 2021b「馬関連の遺構・遺物からみた陸奥国府」『馬と古代社会』pp. 241-252 八木書店
- 117 高橋透 2022「陸奥国中部の様相—多賀城跡・多賀城廃寺跡を中心に—」『第 48 回城柵官衙遺跡検討会資料集』pp. 111-122
- 118 武田健市 2010a「多賀城廃寺と多賀城南面の様子」『第 36 回城柵官衙遺跡検討会資料集』pp. 115-134
- 119 武田健市 2010b「多賀城と城下の木簡出土遺構」『古代東北の城柵と木簡』木簡学会多賀城特別研究集会 pp. 1-25
- 120 武田健市 2020「東北支配の拠点」『季刊考古学』第 152 号 pp. 60-62 雄山閣

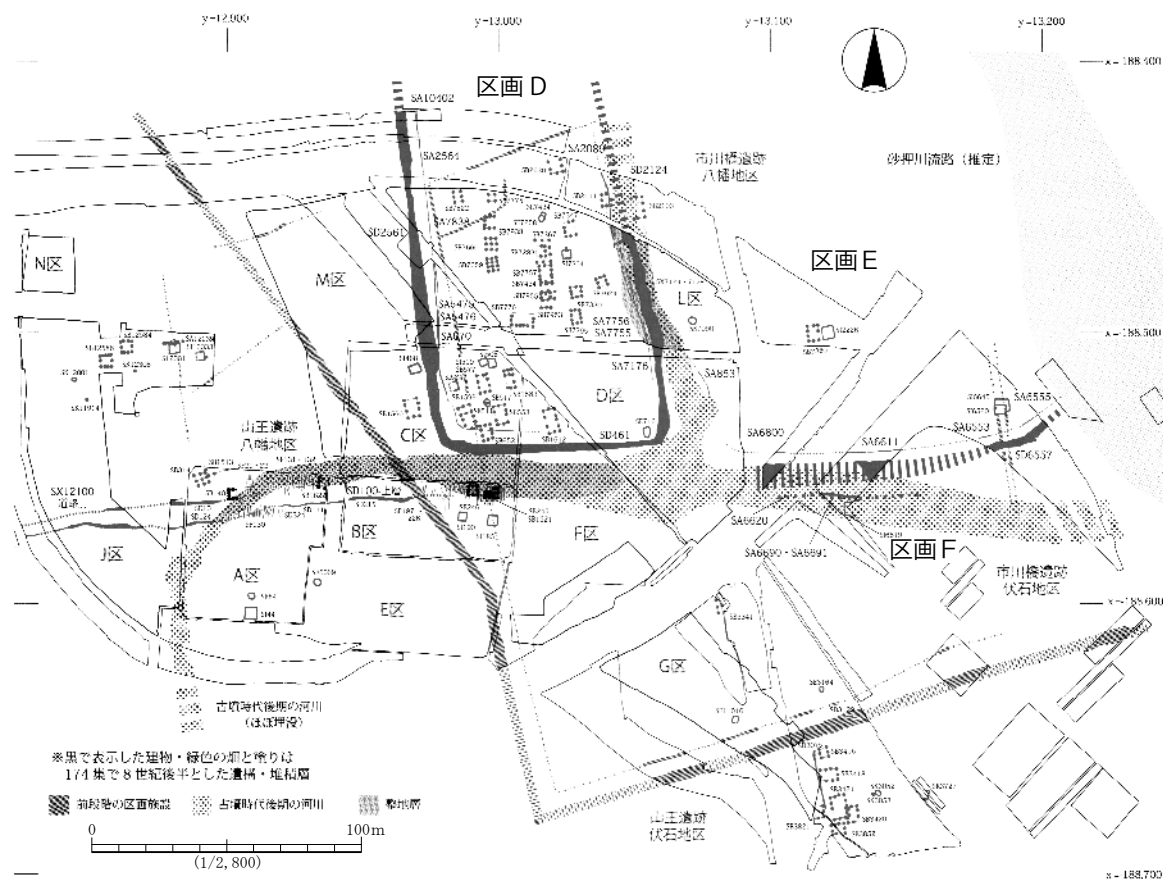
- 121 田中敏長・田中彩子 2004 「市川橋遺跡出土横笛の復元制作について」『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報—平成 15 年度—』 pp. 26-29
- 122 田中広明 2003 『地方の豪族と古代の官人—考古学が解く古代社会の権力構造—』 柏書房
- 123 丹野修太 2020 「山王遺跡第 178・198 次調査」『第 46 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp. 159-164
- 124 千葉孝弥 1993 「多賀城周辺の道路遺構」『古代交通研究』第 2 号 pp. 35-40 古代交通研究会
- 125 千葉孝弥 1994a 「多賀城周辺遺跡の様相—山王遺跡・市川橋遺跡・高崎遺跡—」『第 20 回城柵官衙遺跡検討会資料集』
- 126 千葉孝弥 1994b 「多賀城周辺の道路遺構」『季刊考古学』第 46 号 pp. 56-59 雄山閣
- 127 千葉孝弥 1995 「多賀城城外の道路と方格地割り」『古代文化』第 47 巻第 4 号 pp. 45-54 古代学協会
- 128 千葉孝弥 2010 「多賀城周辺の古代道」『月刊文化財』第 560 号 pp. 34-37 第一法規
- 129 平川南 1999 「古代地方都市論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 78 集 pp. 1-30
- 130 古川一明 2007 「多賀城跡の 11 ～ 12 世紀の土器について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2006』 pp. 72-79
- 131 古川一明 2020 「多賀城」佐藤信（編）『古代史講義【宮都篇】』 pp. 257-276 ちくま新書
- 132・133 宮城県教育委員会 1994・2001 『山王遺跡八幡地区の調査 1・2』宮城県文化財調査報告書第 162・186 集
- 134～139 宮城県教育委員会 1995・1996ab・1997・2014・2018 『山王遺跡Ⅱ～Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第 167・170・171・174・235・246 集
- 140 宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡町地区の調査』宮城県文化財調査報告書第 175 集
- 141 宮城県教育委員会 2004 『山王遺跡伊勢地区の調査』宮城県文化財調査報告書第 198 集
- 142～144 宮城県教育委員会 2001・2007・2009 『市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第 184・209・218 集
- 145 宮城県教育委員会 2003 『市川橋遺跡』宮城県文化財調査報告書第 193 集
- 146 宮城県教育委員会 2015 『山王遺跡・市川橋遺跡の調査』宮城県文化財調査報告書第 238 集
- 147～149 宮城県多賀城跡調査研究所 2013・2020・2021 『多賀城木簡Ⅲ』『多賀城施釉陶磁器』『多賀城跡 政庁南面地区Ⅲ』
- 150 村上裕次 2019 「山王・市川橋遺跡」『第 45 回城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp. 223-230
- 151 村上裕次 2022 「多賀城跡と城下の方格地割」『多賀城と伊勢斎宮—奈良時代末期～平安時代初期の活気にみる歴史的意義—資料集』 pp. 11-20 斎宮歴史博物館
- 152 村田晃一 1995 「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号 pp. 47-72
- 153 村田晃一 2000 「飛鳥時代の陸奥北辺—移民の時代—」『宮城考古学』第 2 号 pp. 45-80
- 154 村田晃一 2002 「7 世紀集落研究の視点（1）」『宮城考古学』第 4 号 pp. 49-72
- 155 村田晃一 2007 「宮城県中部～南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書 pp. 119-163 東北学院大学文学部
- 156 村田晃一 2018 「陸奥国中部における陶硯の生産と消費（1）」『宮城考古学』第 20 号 pp. 167-186
- 157 村田晃一 2022 「陸奥国中部における古代の館と有力者居宅（1）」『宮城考古学』第 24 号 pp. 187-204
- 158 村田晃一 2023 「陸奥国中部における古代の館と有力者居宅（2）」『宮城考古学』第 25 号 pp. 53-74
- 159 村松稔 2004 「市川橋遺跡第 29 次調査出土の横笛について」『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報—平成 15 年度—』 pp. 22-25
- 160 村松稔 2013a 「多賀城城外の災害痕跡について」『第 39 回城柵官衙遺跡検討会資料集』 pp. 61-72
- 161 村松稔 2013b 「多賀城城外における南北大路の創建および拡張時期について」『福大史学』第 82 号 pp. 43-67 福島大学史学会
- 162 柳澤和明 2010 「多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～栗圀式期集落跡の様相」『宮城考古学』第 12 号 pp. 59-85
- 163 柳澤和明 2011 「国府多賀城の祭祀」『東北歴史博物館研究紀要』第 12 号 pp. 29-54
- 164 柳澤和明 2012a 「多賀城の墓制—集団墓地と単独墓地—」『考古学研究』第 58 巻第 4 号 pp. 67-86
- 165 柳澤和明 2012b 『日本三代実録』より知られる貞観一一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興『歴史』第 119 輯 pp. 27-58 東北史学会

- 166 柳澤和明 2013a 「発掘調査より知られる貞観一一年（八六九）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『史林』第96巻第1号 pp. 5-41 京都大学史学研究会
- 167 柳澤和明 2013b 「発掘調査からみた貞観11年（869）陸奥国巨大地震・津波の被害とその復興」『宮城考古学』第15号 pp. 81-98
- 168 柳澤和明 2016 「陸奥国府多賀城の万燈会」『歴史』第127輯 pp. 118-138 東北史学会
- 169 柳澤和明 2019 「869年貞観地震・津波発生時における陸奥国府多賀城周辺の古環境」『歴史地震』第34号 pp. 127-146 歴史地震研究会
- 170 柳澤和明 2020 「陸奥国府多賀城跡の国司館」『条里制・古代都市研究』第35号 pp. 93-104
- 171 山中章 1990 「古代都城の交通—交差点からみた条坊の機能—」『考古学研究』第37巻第1号 pp. 57-82
- 172 山中章 1997 「桓武朝の新流通構造—壺Gの生産と流通—」『古代文化』第49巻第11号 pp. 52-63 古代学協会
- 173 山中章 1999 「多賀城方格地割と交通」『古代交通研究』第9号 pp. 137-150
- 174 吉野武 2011 「多賀城と城下の木簡」『木簡研究』第33号 pp. 238-252
- 175 吉野武 2015a 「多賀城と陸奥国南部の諸郡」『第41回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp. 79-96
- 176 吉野武 2015b 「陸奥国の城柵と運河」『古代日本の運河と水上交通』pp. 283-302 八木書店

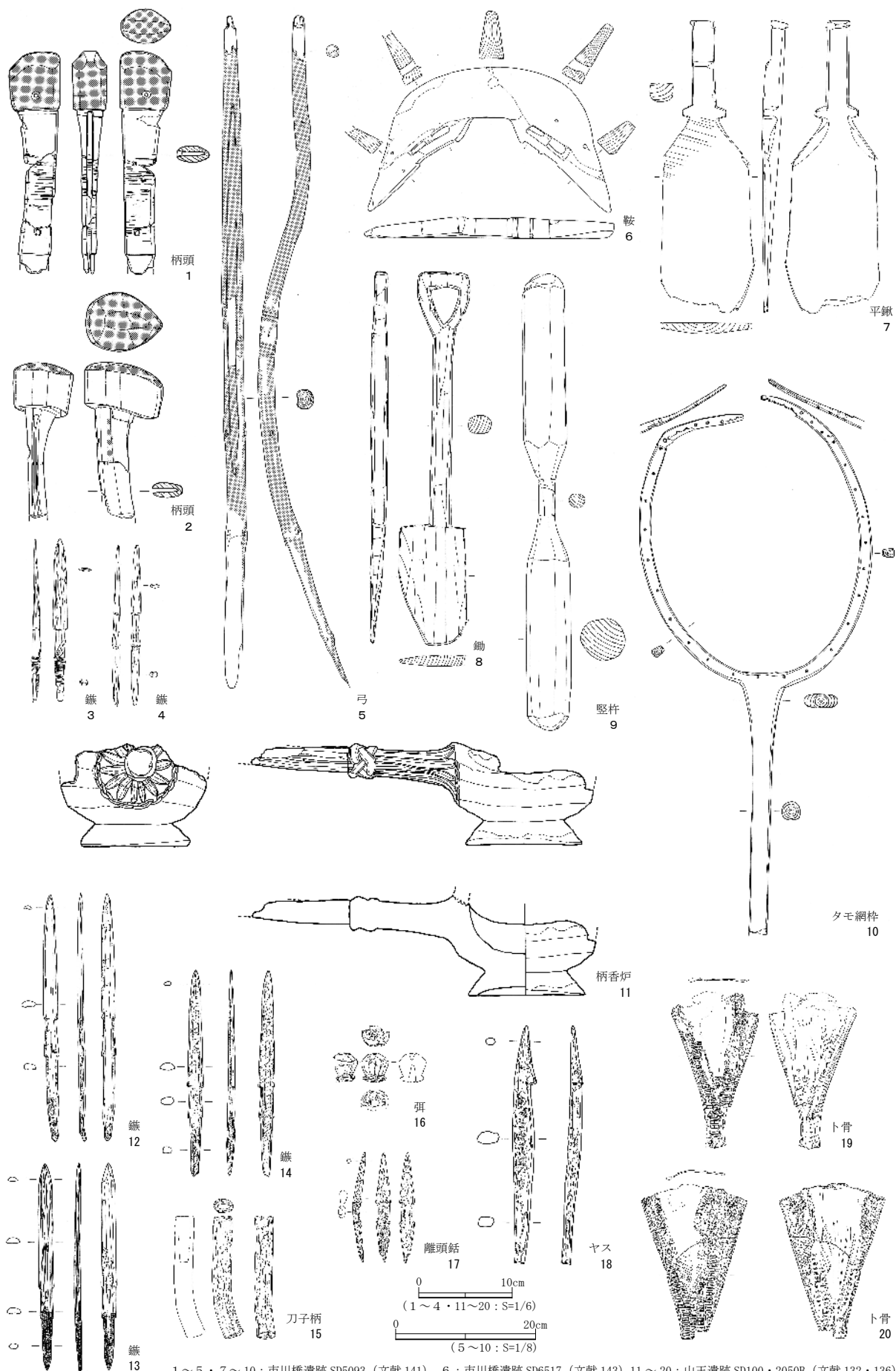




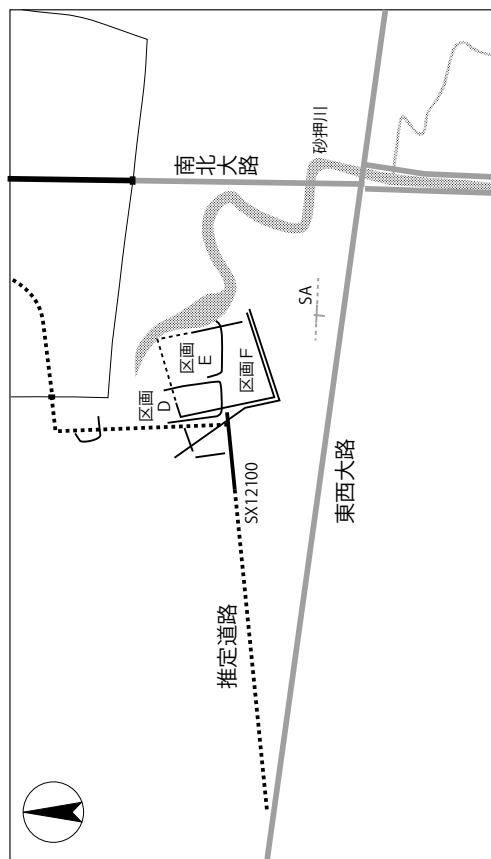
第4図 八幡・伏石地区における区画2期全体図 (文献139に加筆・修正)



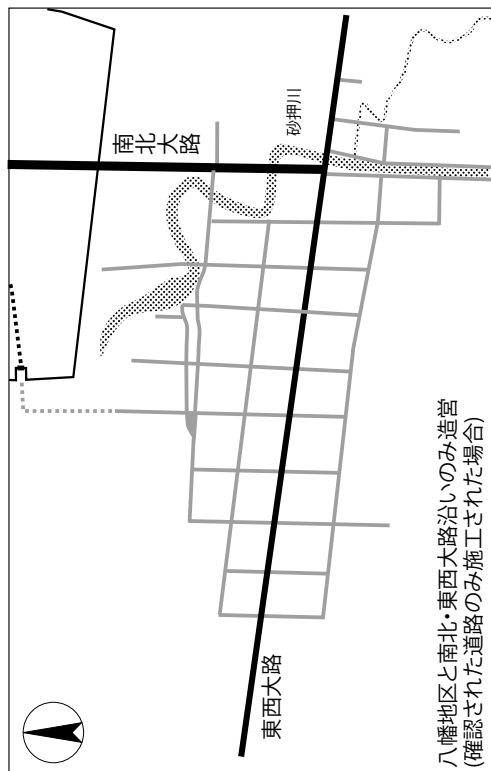
第5図 八幡・伏石地区における区画3期全体図 (文献139に加筆・修正)



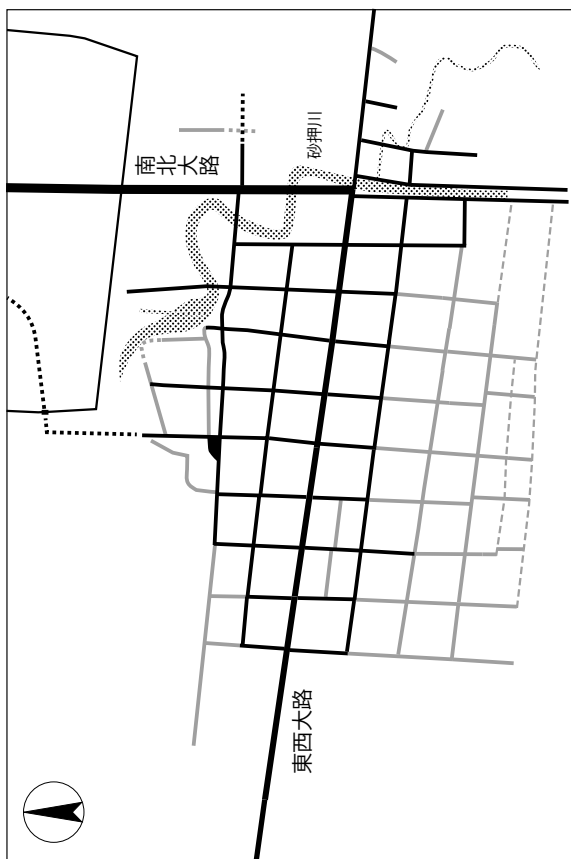
第6図 区画1期の主要な木製品（1～11）・骨角製品（12～18）（各文献より作成）



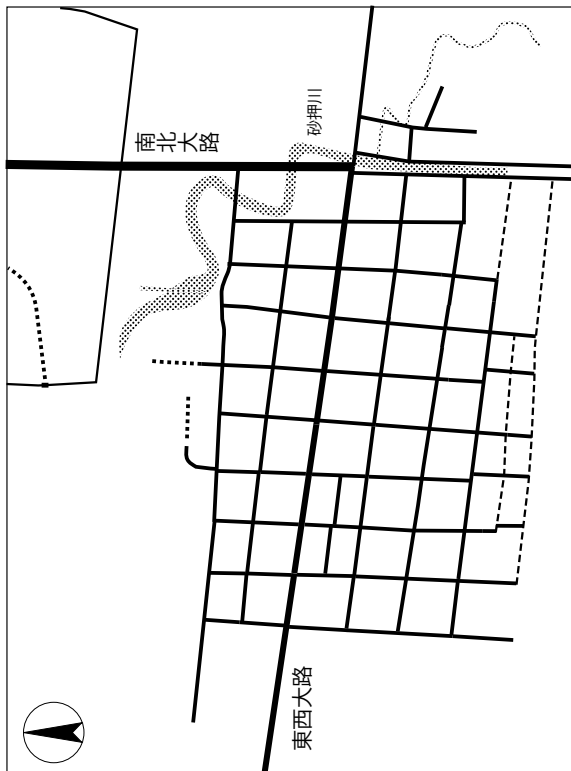
①区画3期（8世紀後半頃）



②方格地割Ⅰ期（8世紀末～9世紀前半頃）



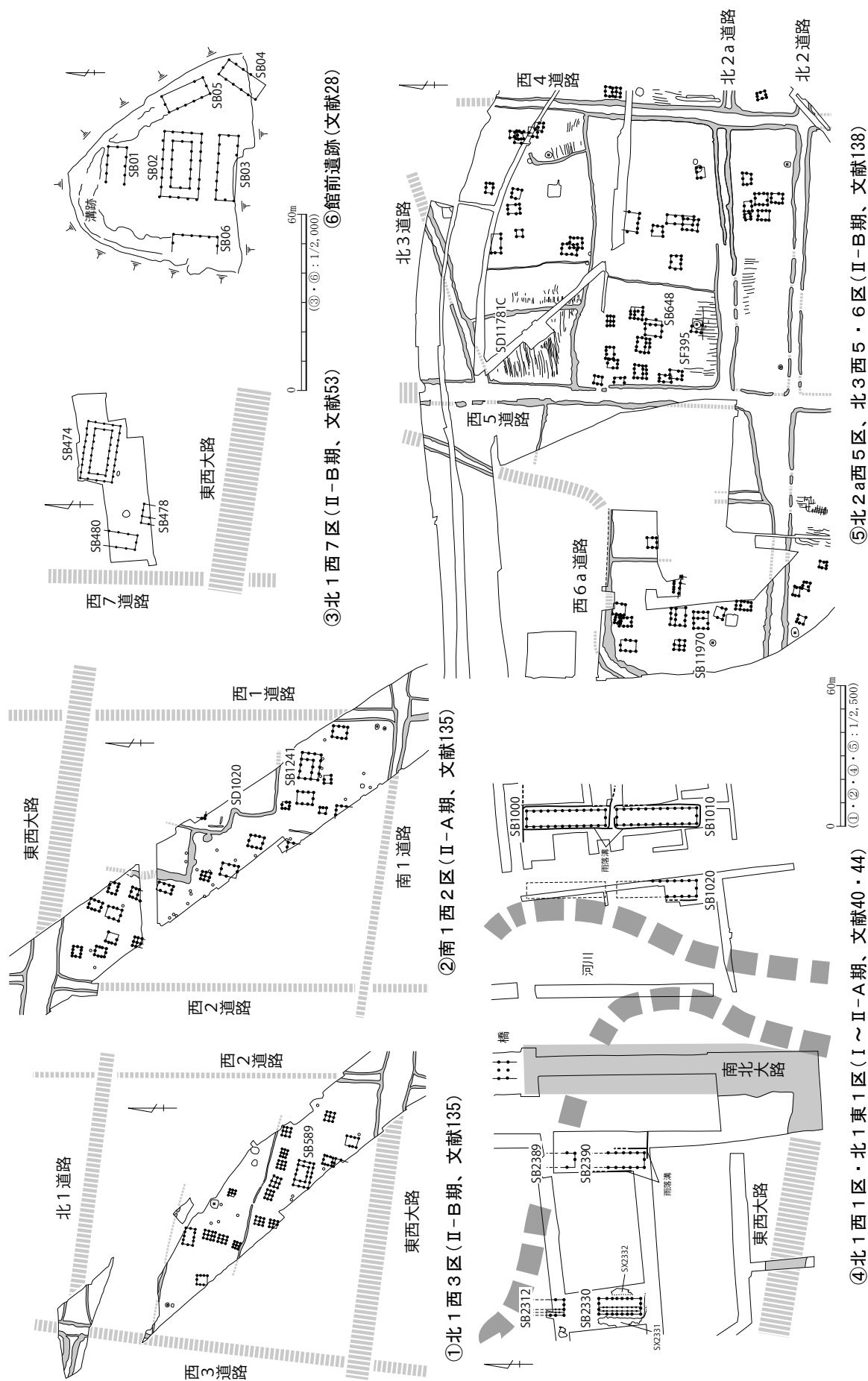
③方格地割Ⅱ期（9世紀中葉～10世紀前半頃）



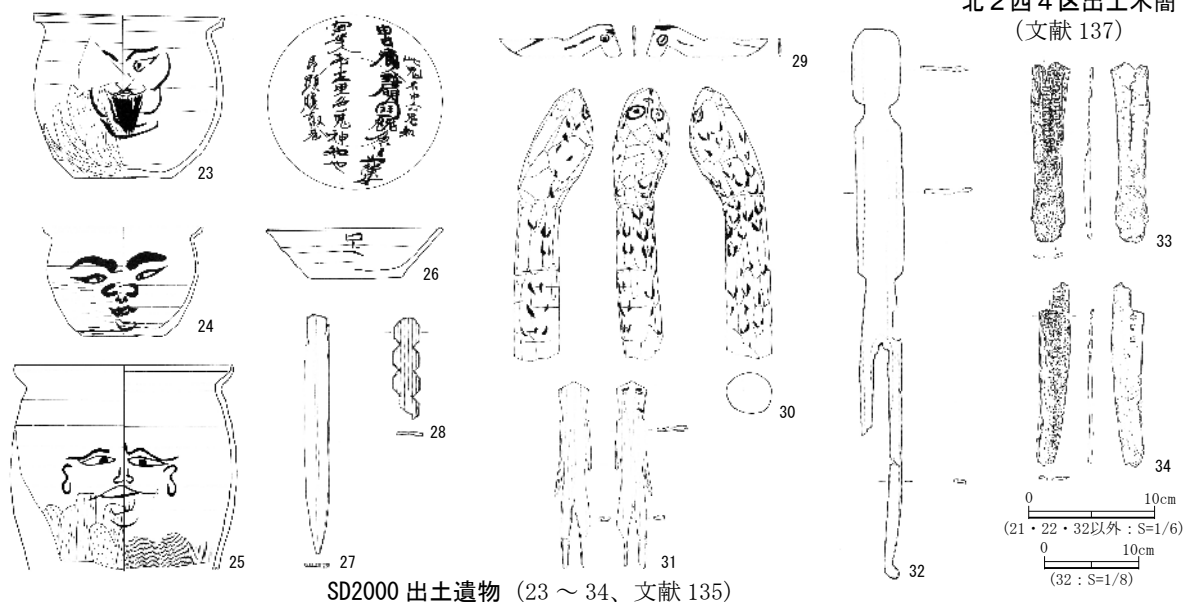
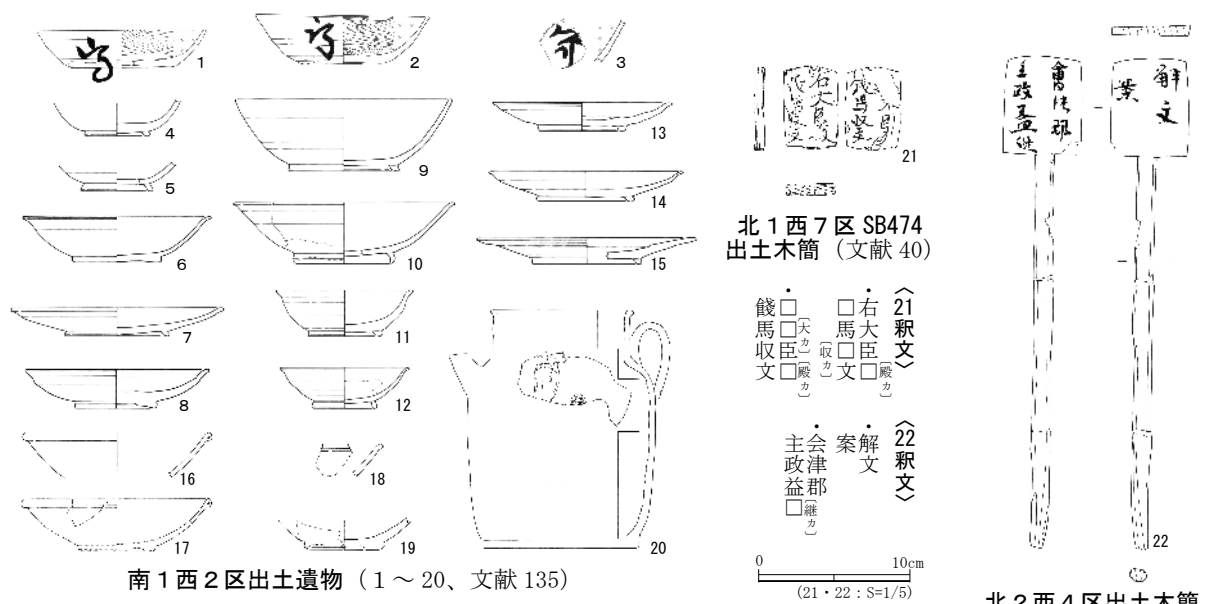
④方格地割Ⅲ期（10世紀後半頃）

— :新たに施工された道路を結んだ箇所 :道路の延長が考えられる箇所 — :発見した道路を結んだ箇所 (1/18,000)

第7図 方格地割の変遷（文献139をもとに文献109・123・151を参考にして作成）



第8図 主要な街区の建物配置模式図 (各報告書からトレースして作成)



第9図 方格地割Ⅰ～Ⅲ期の主要な遺物 (各文献より作成)

